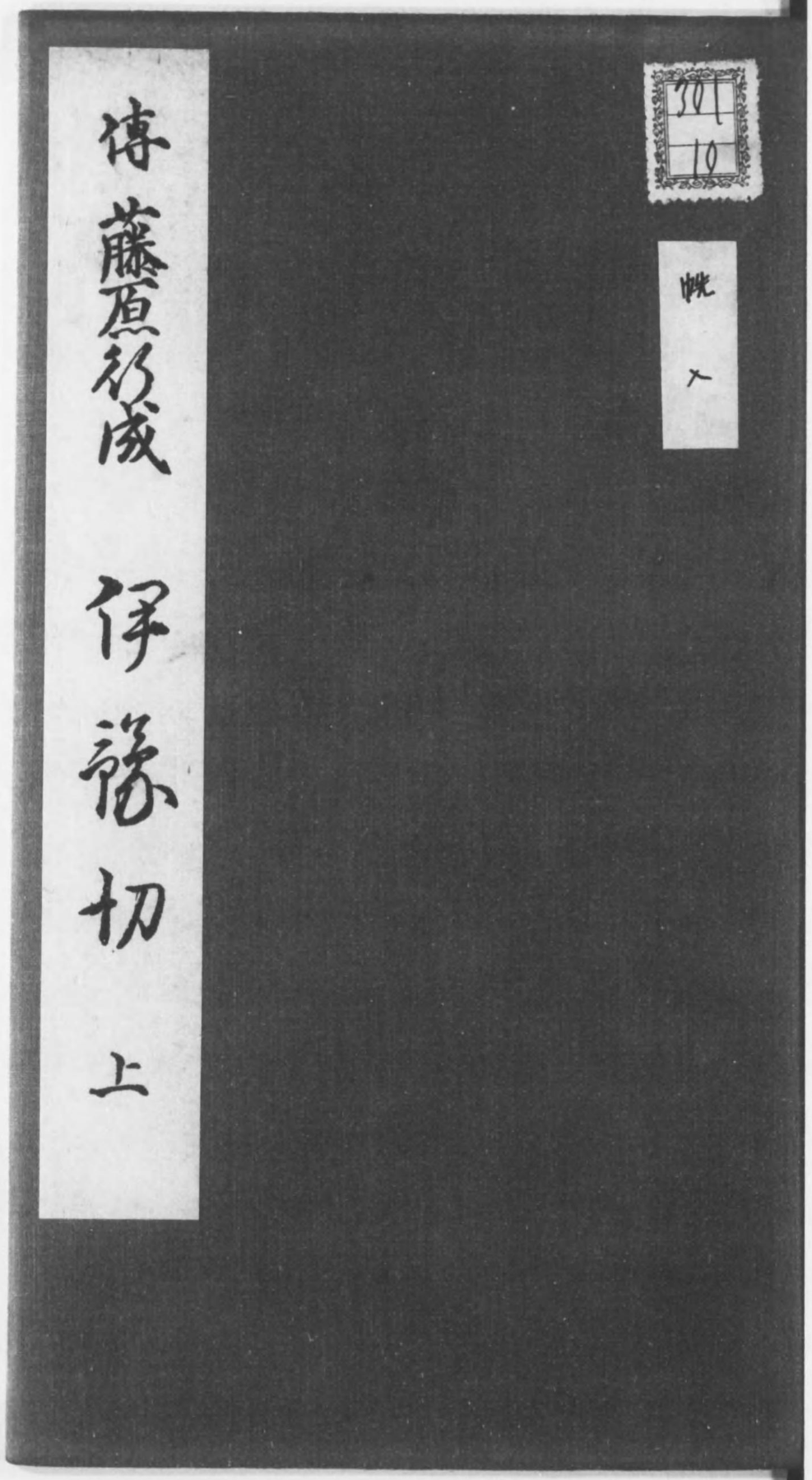


始

傳藤原行成書

伊豫切

（和漢朗詠集）

釋文

上

傳藤原行成筆　伊豫切（上）　解題並釋文

解題

藤原行成の筆と言はれ普通御物朗詠といへば行成本を指すものとされてゐる程代表的のものゝ御物和漢朗詠集と同筆と見るべきものに伊豫切朗詠集がある。もと伊豫國西條藩主松平子爵家に所藏されてゐたものでこの名がある。料紙は雲母を少しくまき飛び雲をあしらつた鳥の子を用ひてゐる。始めの春より螢火亂飛の一葉までは同手であるがその以下は書風は全くおなじやうであるが別手であらむ。兩者を比較して見る時幾分の相異を見るので或人は全々別手の人によつて書寫されたるものではあるまいかと述べているがその時の氣分料紙の關係で幾分の相違を生ずるがやはり行成の筆と見做す方が溫當であらう。殆ど全部が一貫した氣分で草書で書いてあり非常

に圓熟の境地を見せてゐる。筆づかひもおだやかで輕い味ひに富んでをり調子も大分變化がある。換言すれば御物本の方に見られぬ所の筆のはこびの穩かさと輕さと調子のうごきとが味はれるのである。これと同筆かと見るべきものに高野切雜下、法輪寺切、元暦校本萬葉集第一卷等がある。

釋文

倭漢朗詠集卷上

春

立春　早春　春興　子日。付若菜

三月三日　暮春　三月盡　閏三月

鶯　霞　雨　梅付紅梅　柳　花付落花

躑躅・藤　欵冬

夏

更衣　首夏　夏夜　端午　納涼

晚夏　花橘　蓮　郭公　螢　蟬

秋

立秋　早秋　七夕　秋興　秋晚

秋夜　八月十五夜付月　九月付菊　九月盡

女郎花　萩　蘭　槿　前栽　紅葉

付落葉　雁　付歸雁　虫　鹿　露　霧

擣衣

冬

初冬　冬夜　歳暮　爐火　霜

氷付春氷　雪　霰　佛名

春

立春

遂吹潜開不待芳菲之候迎春午

變將希雨露之恩立春日内園蓮花賦

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒荒茂

としのうちに者るは支爾个りひとゝせ

をこ所とやい者むことしとやい者む在原元方己上舊年

柳無氣力條先動池有波文氷盡開白

今日不知誰計會春風春水一時來同上

夜向殘更寒磬盡春生香火曉爐燃立春山寺良春道

曾氏ひぢでむ春びしみづのこ保れる

をはる多つけふの可世やと久ら無紀貫之

者る多つといふば可り爾やみよし

のゝや万も可須みてけふ八みゆらむ忠岑

早春

氷消田地蘆錐短春入枝條柳眼低元

先遣和風報消息續教啼鳥說來由白

東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝

之梅開落已異春生遂地形保胤

紫塵爛漫人拳手碧玉寒蘆錐脫囊野

氣霽風梳新柳髮、氷消浪洗舊苔鬚。都草揃晴庭增菊色、晴沙綠、林變容輝。宿雪紅。返春紀

い者曾ゝ久多るひのうへのさわらび能も

えいづる波る爾な利爾个る可那志貴皇子

た爾可せ爾と久るこほりのひまごと爾

うちいづる那美や者るのはつ者な源富純

三わ多世ばひらの多可ね爾ゆ支ゝえ

てわ可那つむべ久の者な利爾遣り源兼盛

春興

花下忘歸因美景、樽前勸醉是春風。白

野草芳菲紅錦地、遊絲繚亂碧羅天。劉禹錫

哥酒家々花處々、莫空管領上陽春。白

山桃復野桃、日曝紅錦之幅、門柳復

岸柳、風綰麴塵之絲。遂處花皆好齊名

着野展敷紅錦繡、當天遊織碧羅綾。野

林中花錦時開落、天外遊絲或有無。田達音

笙歌夜月家々思、詩酒春風處々情。悅者衆

毛ゝし支の於保みやびとはいとまあれ

やさ久ら可散してけふ者久らしつ赤人

波る者那本王れ爾して利ぬ者那さ可

利こゝろのどけ支人者あらじ那忠岑

春夜

背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春。白

者るのよ能やみ者あやなしむめの八

那いろこ曾みえね可やはか久るゝ躬恒

倚松樹、以摩腰、習風霜之難犯也。

和菜羹而啜口、期氣味之克調也。菅

倚松根摩腰千年之翠滿手、折櫻

花挿頭、二月之雪落衣 尊敬

ねのび春る能べ爾こまつのな可りせば

ちよの多めしにな爾をひ可万志 忠岑

ち年せ万でち支利し万徒も今日よ

利はきみ爾ひ可れ氐よろづよやつむ 能宣

ねのひしにしめつる能べのひめこ万つひ

可でやちよの可けをまたまし 清正

若菜

野中芝菜世事推之蕙心、鑪下和羹、俗人屬之羹措。菅

あ春可らはわ可那つませ无可たを可

能あしたのはら者今日曾や久める人丸

者る多ゝばわ可那つまむとしめし能

爾支のふもけふ毛ゆ支はふ利つゝ赤人

ゆきてみぬ人毛し能べと者るのゝ能

可たみ爾つめるわ可那ゝ利个り貫之

三月三日 付桃

春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋 王羅

春之暮月、々之三朝天醉于花、桃

李盛也。我后一日之澤、万機之餘、曲

水雖遙、遺塵雖絶書巴字而知地

勢、思魏文以翫風流、蓋志之所

之。謹上小序。菅

煙霞遠近應同戸、桃李淺深似勸盃。

水成巴字初三日、源起周年後幾霜。篤茂

礙石遲來心竊待、牽流遣過手先遮。雅規

夜雨偷濕、曾波之眼新嬌曉風緩

吹、不言之口先咲。桃始華賦

みちとせになるといふもゝのことしよ

利者那さ久はる爾あひ曾め爾个利

暮春

拂水柳花千万點、隔樓鶯舌兩三聲。元

低翅沙鷗潮落曉、亂絲野馬草深春。

人無更少時須惜、年不常春酒莫空。

劉白若知今日好、應言此處不言何。

い多づら爾春久須つきひはおほ可れと

者那み氐久ら須はるぞ春久那き

三月盡

留春々不住、春歸人寂漠厭風々

不定、風起花肅索。白

竹院君閑銷永日、花亭我醉送殘春。白

惆悵春歸留不得、紫藤花下漸黄昏。白

送春不用動舟車、唯別殘鶯與落花。菅

若使韶光知我意、今霄旅宿在詩家。同上

留春不用關城固、花落隨風鳥入雲。草敬

けふとのみ者るをお无はぬと支だ爾も

多つことや春支者那の可げか盤躬恒

者那もみなちりぬるやどはゆ久者る

のふるさとゝこ所なりぬべらなれ貫之
またもこむと支そとおもへど多のま
れぬわ可み爾あれ者をし久もある可那貫之

閏三月

今年閏在春三月剩見金陵一月花陸侍御

歸鴈歌鶯更逗留於孤雲之路辭

林舞蝶還翩翩於一月之花

花悔歸根無徒悔鳥期入谷定延期藤滋藤

さ久ら者那者る久はゝれるとしだ爾
もひとのこゝろ爾あ可れや者寸る伊勢

鶯

鷄既鳴兮忠臣待且鶯未出兮遺
賢在谷鳳爲王賦

誰家碧樹鶯啼而羅幕猶垂幾
處華堂夢覺而珠簾未卷曉賦

咽霧山鶯啼尙少穿沙蘆筍葉纔分元
臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池白
鶯聲誘引來花下草色拘留生水邊白
感同類於相求離鴻去雁之應春
囀會異氣而終混龍吟魚躍之
件曉啼

燕姬之袖暫收猜撩亂於舊栢周郎
之簪頻動顧間關於新花菅三品

新路如今穿宿雪舊宿爲後屬春雲菅
西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音菅三品
あら多万のとしたち可へるあし多よ利

またるゝも能者う久ひ春のこゑ素性
阿さみどり者る多つ曾らにう久ひ春の八
つこゑま多ぬひとはあらじ那麗景殿女御
う久ひ春のこゑ那可利世ばゆ支ゝえ
ぬやまざとい可で者るをしらまし中務

霞

霞光曙後殷於火、草色晴來爛似烟。白
鑽沙草只三分許、跨樹霞纔半段餘。菅
きのこ曾としはくれし可者る可須み
可春可能や万爾者や多ちに遣利人丸
はる可須み多てるやい徒こみよしのゝ
よしのゝや万にゆきはふ利つゝ
あ散ひさ須三ねのしらゆ支むら支

えて者るの可須みはゝや多ち爾个利

雨

或垂花下潛增墨子之悲、時舞鬚
間晴動潘郎之思。密雨散絲賦

長樂鐘聲花外盡、龍池柳色雨中深。李橋
養得自爲花父母、洗來寧辨藥君臣。紀
花新開日初陽潤、鳥老歸時薄暮陰。菅三品
斜脚暖風先扇處、暗聲朝日未晴程。保胤
さ久ら可利あめはふ利支ね於なし久
ばぬると无者那の可け爾可久れむ
あをや支のえ多に可ゝれる者るさめは
いともてぬ个るたま可と曾みるいせ

梅

白片落梅浮潤水、黄梢新柳出城墻、白

梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中。章幸標

漸薫臘雪新村裏、偷綻風未扇先。村上御製

青絲出陶門柳、白玉裝成庾嶺梅、江相公

五嶺蒼〻雲往來、但憐大庾万株梅。

誰言春色從東到、露暖南枝花始開。菅三品

い爾しとしねこ志てうゑしわ可やど

能わ可支のむめはゝ那さ支に遣り安倍廣庭

王可せこ爾み世んとおも悲しむめの者

那曾れと无みえ須ゆきのふれゝ盤赤人

可乎とめて多れをらざら无むめ能八那

あや那し可須み多ち那可久し所躬恒

紅梅

梅舎鷄舌兼紅氣、江弄瓊花帶碧文。元

淺紅鮮娟仙方之雪、媿色濃香芳郁、

妓鑪之煙讓薫。正通

有色易分殘雪底無情難計夕陽中。中書王

仙臼風生空簸雪、野鑪火暖未揚煙、齊名

きみ那らで多れ爾可み世むゝめの者那

いろをも可を无しるひと曾しる友則

移ろ可をばお无ひもいれずむめの者な

つねならぬよ爾よ所へて曾みる華山院御製

柳

林鶯何處吟箏柱、墻柳誰家曝麴塵、白

漸欲拂他騎馬客、未多遮得上樓人。白新柳

巫女廟花紅似粉、胎君村柳翠於眉。白同上

誠知老去風情少見此爭無一句詩白

大庾嶺之梅早落、誰問粉粧匡廬山之杏末開豈趁紅艶江納言

雲擎紅鏡扶桑日、春嫋黃珠嫩柳風。後中書王

苔宅迎晴庭月暗、陸池逐日水煙深。菅三品

潭心月泛交枝桂、岸口風來混葉蘋。菅三品

あをやぎの枝桂、岸口風來混葉蘋。

美多れて者那は保ころび爾个る貫之

者る久れ者しだ利やな支能万よふいとの

いも可こゝろ爾い利爾ける可那

あをやぎの万ゆ爾こもれるいとなれはゝ

るの久る爾所いろ万さ利ける中納言兼輔

花付落花

花明上苑、輕軒馳九陌之塵、猿叫空山、斜月瑩千巖之路。園賦

池色溶々藍染水、花光煽々火燒春。白

遙見人家花便入、不論貴賤爲親疎。白

瑩日瑩風、高低千顆万顆之玉、染枝

染浪、表裏一入再入之紅。花光浮水上 菅三品

誰謂水無心、濃艶臨兮波變色、誰謂

花不語、輕漾激兮影動唇。同上

欲謂之水、則漢女施粉之鏡清瑩、欲

謂之花、亦蜀人濯文之錦粲爛。同上 順

織自何絲、唯暮雨裁無定樣、任春風。菅三品

花飛如錦幾濃粧、織着春風末疊箱。

始識春風機上巧、非唯織色織芬芳。英明

眼貪獨郡裁殘錦、耳倦秦城調盡箏。相規

よのな可に多えてさ久らの那可利せはゝ
るのこゝろはのとけ可ら末し
わ可やとの者那み可てら爾久るひとは
ちりな无能ち曾こ悲し可るへ支射恒
みての美やひとに可多らむやまさくらて
ごとにを利てい邊徒と爾世ん素性

落花

落花不語空辭樹、流水無心自入池。白
朝踏落花相伴出、暮隨飛鳥一時歸。白
春花面々闌入酣暢之筵、晩鶯聲々
豫參講誦之座。江
落花狼籍風狂後、啼鳥龍鐘雨打時。江

離閣鳳翎憑檻舞、下樓娃袖顧階飜。菅三品
さくらちるこのし多可世はさむ可
らて所ら爾しられぬゆ支曾ふ利个る
とのも利能とものみや徒こゝろあら八
こ能こゝろは可利あさ支よめ須那

藤

帳望慈恩三月盡、紫藤花落鳥關々。白
紫藤露底殘花色、翠竹煙中暮鳥聲。相規
たごのうらにそこさへ爾本ふゝぢ那
みを可ざしてゆ可むみぬひとの多め繩丸
と支は那るまつ能な多て爾あやなくも可
ゝれるふぢのさ支てちる可那貫之

躑躅

晩藥尙開紅躑躅、秋房初結白芙蓉。白

夜遊人欲尋來把、寒食家應折得驚。秋

おもひいづると支はのや万能い盤つゝじ
い者ね盤こ所あれこ悲し支ものを

歎冬

點著雌黄天有意、歎冬誤綻暮春風。

書窓有卷相收拾、詔紙無文未奉行。保胤

可はづ那久可み那ひ可はに可げみえてい
万やちるらんやまぶ支の者那厚見女皇
わ可やどのやへ夜万ぶ支のひとへ多爾ち
り能こらなん者るの可多み爾兼盛

夏

更衣

背壁殘燈經宿燼、開箱衣帶隔年香。白

生衣欲待家人着、宿醸當松邑老酣。讃州作

者那のいろ爾曾めしたもとのをし个
ればころも可へう支けふ爾もある可那

首夏

甕竹頭葉經春熟、階底薔薇入夏開。白

苔生石面輕衣短、荷出池心小蓋疎。物部安長

わ可やどの可支ねや者るをへ多徒らんな
つきに遣りとみゆるうの者那順

夏夜

風吹枯木晴天雨、月照平沙夏夜霜。白

風生竹夜窓間臥、月照松時臺上行。白

空夜窓閑螢度後、深更軒白月明初。白

なつ能よをねぬ爾あ个ぬといひお支し
ひとはもの乎や於もはざるらん
本とゝぎ須な久やさつ支のみじ可よも
ひ東利しぬれ者あかし可ねつ毛人丸
なつのよ能ふ春可と春れは於のつ可
本とゝぎ須なくひとこゑ爾あくるしのゝめ

端午

有時當戸厄身立無意故園任脚行菅
わ可こまとけふ爾あひ久るあやめぐさ於
ひ於久るゝや万くるな累らん頼基
き能布までよそ爾お无ひしあやめく
散けふわ可やどの徒まとみる可那能宣

納涼

青苔地上鎖殘雨綠樹陰前逐晚涼白
露簟清瑩迎夜滑襟蕭灑先秋涼白
不是禪房無熱到但能心靜即身涼白
班婕妤團雪之扇代岸風兮長忘燕
昭王松涼之珠當沙月兮自得這衡
臥見新圖臨水障行吟古集納涼詩菅
池冷水無三伏夏松高風有一聲秋英明
數ゝしやと久さ无らごとに多ちよれ八
あつさ曾まさるとこ那つの者那
した久ゝるみづにあきこそ可よふ奈れ
む春ぶいづみ能て散へ須ゝし支中務
万つ可げのい盤ゐのみづをむすびつゝ
な徒な支とし登於も日个る可那

晩夏

竹亭陰舍偏冥夏、水檻風涼不待秋。白

なつはつるあふ支とあきのしらつゆとい
づれ可まつは於可むと春らん

ね支こともき可であらぶる可み多ちも
けふはなごしとひとはいふ奈利

橘花

廬橘子低山雨重、栟櫚葉戰水風涼。白

枝繫金鈴春雨後、花薰紫麝蹶風程。後中書王

さつ支万つ者那多ちば那の可を可个盤む
可し能ひとのそでの可所春累

本とゝ支須者那多ちばなの可をとめ
てなくはむ可し能ひとやこ悲し支

蓮

風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂漠紅。白

葉展影蘸當砌月、花開香散入簾風。白

煙開翠扇清風曉、水泛紅衣白露秋。許渾

岸竹條低應鳥宿、潭荷葉動是魚遊。

緣何更覓吳山曲、便是吾君座下花。

經爲題目佛爲眼、知汝花中植善根。爲憲

者ち春ばの爾ご利に所万ぬこゝろもて
など可はつゆをたまとあ散無久

郭公

一聲山鳥曙雲外、万點水螢秋學中。許渾

さつ支やみ於ぼつ可那支爾本とゝぎ寸那
久那るこゑ能いとゞ者るけさ明香王子

ゆ支やらでやまぢ久らしつほとゝぎ
春いまひとこゑの支可ま本しさ爾公忠
さよふけてねざめざりせば本とゝぎ須
ひとづて爾こそ支久べ可利个れ忠見

螢

螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長。元
霞兼水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋。許渾
明々仍在、誰追月光於屋上、皓々不消豈
積雪斤於床頭。紀

山經卷裏疑過岫、海賦篇中似宿流。直幹
久さふ可くあれ多るやどのと毛しびの可
せにきえぬば本多るなり个利
徒ゝめど无可久れぬものはなつむし

のみよりあまれる於もひな利个利

蟬

遲々兮春日、玉甃暖兮溫泉溢嫋々兮秋
風、山蟬鳴兮宮樹紅。惡宮高白
千峰鳥泳含梅雨、五月蟬聲送麥秋。
鳥下綠蕪秦苑寂、蟬鳴黃葉漢宮秋。
今年異例腸先斷、不是蟬悲客意悲。菅
歲去歲來聽不變、莫言秋後逐爲空。紀

扇

なつやまの三ねのこ須ゑし多可个れ
ば所ら爾所せみのこゑも支こゆる
これをみよひともと可めぬこひすとて
ねをなくむしのなれる春可たを重光大納言

盛夏不鎖雪終年無盡風引秋生手裏、
藏月入懐中。百

不期夜漏初分後唯翫秋風未至前。管三品

あまの可はゝゝへ寸ゞし支多那者た爾あふ
きの可せを那本や可さ万し中務
阿ま能可者あふ支の可せに久も八れて
所ら須みわ多る可さゝ支の八し
きみ可て爾万可須るあ支能可せ奈れ盤
なび可ぬ久さもあらじと所お无ふ中務

昭和十一年八月廿一日印刷
昭和十一年八月廿五日發行　定價金貳圓參拾錢

伊豫切
（上）

編輯者　東京市下谷區中根岸町七二武田墨彩堂内
かな名蹟全集刊行會
代表者　武田基一

發行人　東京市下谷區中根岸町七二
武田基一

印刷人　東京市荒川區南千住町六丁目一六〇
黒川秀藏

發行所　東京市下谷區中根岸町七二
武田墨彩堂
電話根岸三五七番
振替東京六〇五四八番

俳諧歌集上

春

立春　早春　春興　春夜　子日　付若菜

二月二日　付杞　菅春　三月末　閏三月

霞　雨　梅　付紅梅　柳　花　付桜

鶯　蕨　歌

夏

夏木　首夏　夏夜　蟬　夕陽

晩夏　花桐　蓮　新茶　昼寝

秋

立秋　冷秋　七夕　秋興　秋暮

秋夜　月夜　名月　九月　九月尽

冬籠　萩　菊　柳　菊

出菊　霧　霧

橘太

冬

初冬　冬夜　冬籠　焚火　霜

氷　冬至　雪

春

立春

逐吹潜開不待芳菲之候迎春乍変将希雨露之恩 立春日内園進花賦

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒 篤茂

としのうちにはるはきにけりひとゝせをこそとやいはむことしとやいはむ 在原元方 古今集序

柳無気力条先動池有波文氷尽開今日不知誰計会春風春水一時来 同上

夜向残更寒磬尽春生香火暁炉灯 山寺立春 良春道

そてひちてむすひしみつのこほれるをはるたつけふのかせやとくらむ 紀貫之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たにかせにとくるこほりのひまことに
うちいつるなみやはるのはつはな　源當純

こゑたえすなけやうくひすひととせに
ふたたひとたにくへきはるかは　興風

春興

花下忘歸因美景　樽前勸醉是春風　白

野草芳菲紅錦地　遊絲繚亂碧羅天　劉禹錫

歌酒家々花處々　莫空管領上陽春　白

山桃復野桃　日曝紅錦之幅　門柳復岸柳　風宛麹塵之絲　高名

着野展敷紅錦繡　當天遊織碧羅綾　野

林中花錦時開落　天外遊絲或有無　田達音

モシクハ アリモヤスラン ナクモヤアルラン

[illegible]

[illegible]

花橘頭二首　雪蕉　当春

ゆのひとをのつ、まのあわせは
ちまれまし　にたるをひうて　春
ふまこ　ゝとをまし　一ぢも　ちよ
わはまみをひうわくよつよやつむ　ゆ立
ゆのひとにしあつるゆくのひめこ　ひ
ゝをやちまのつはけをまたよりく　清正

若菜

野中の芝菜老事惟こ　蕙心鐘古和
義信ノ　屬こ芳美　指　首
あちこはわつれ　ちまこ　ふ
ゆあ　たかはけをこ　ちこ　や　ちあこ　光

さくらさいはわかれつまむ〜〜めれ
るものふもはゝもゆまはけふわつ〜表人
ゆきてみわ人　みてとそるのゝ
うたみるつゝるわ。れ、わくら　表〜

三月三日　桃花

春来遍是桃花水不負仙源問渡津

三月三日　桃花

春〜〜〜月〜〜〜三朝天陸ゟ花桃
雪雲や我后一ゟ〜〜流ゟ機〜〜條也
水能色遠蔭陸花出已家ゟ花
坊里新文ゟ散風流美表〜〜
〜〜蓮上小庭　蓋

桃源春水流桃花

水茎の岡の辺の緑の揺れ
磯の石垣なれ心の緒絶えず流れて
夜の面影の浮き沈む
吹く風に乱れ
みちのくに
わすれさるはあひそめし
枕草紙

暮春

排水柳花乱方歩
位翅沙鷗飛
人生
別白髮

たゝしはつ千とせをかけ

三月盡

留まゝ不任春の人ゝ情秋風し

ふ心風に乱る菊上ふ白

終宴春ふ清の日花ゝ多我辞ゝ

別書白

惆悵春の留ふ滑紫蘇花に漸黄成白

送書ふ用動身ゝ時ゝ別 拔萃

ゝ兼の花 首

ゝ多ゝ文都出ゝ影ゝ三ゝ今書桜ゝ白立ゝ乱ゝ風

留書ふ頭黄珠用花落ゝ風ゝ人雲ゝ

けゝものみたるを拔はゝゝゝたるも

とゝ[illegible]やまをよそれのけかを　彰恒

きれもみなうたかはるとはゆはる

のゝうゝさゝゝ[illegible]ゝなれ　景

またもゝむとまそとたもつとゝあと

れはわゝゝしあれをゝゝもあゝゝ　景

同三月

今年ゝ立春三月剃見立淡一月花　陸

詠歌[illegible]ゝ逢百花於弧雲ゝ詠歌

林業[illegible]ゝ　加賀　蝴弥一月ゝ克

花惜詠根岳蓋搖香新入谷宮正期　茂

さゝゝさゝれはゝれゝゝたゝ

もひとのゝゝゝゝゝやをまる　伊勢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

之管領勒所置其於移花 菅三品

新路如今穿宿雪 旧巣為後属春雲 菅

西楼月落花間曲 中殿燈残竹裏音 菅

あらたまのとしたちかへるあしたより
またるゝものはうくひすのこゑ 素性

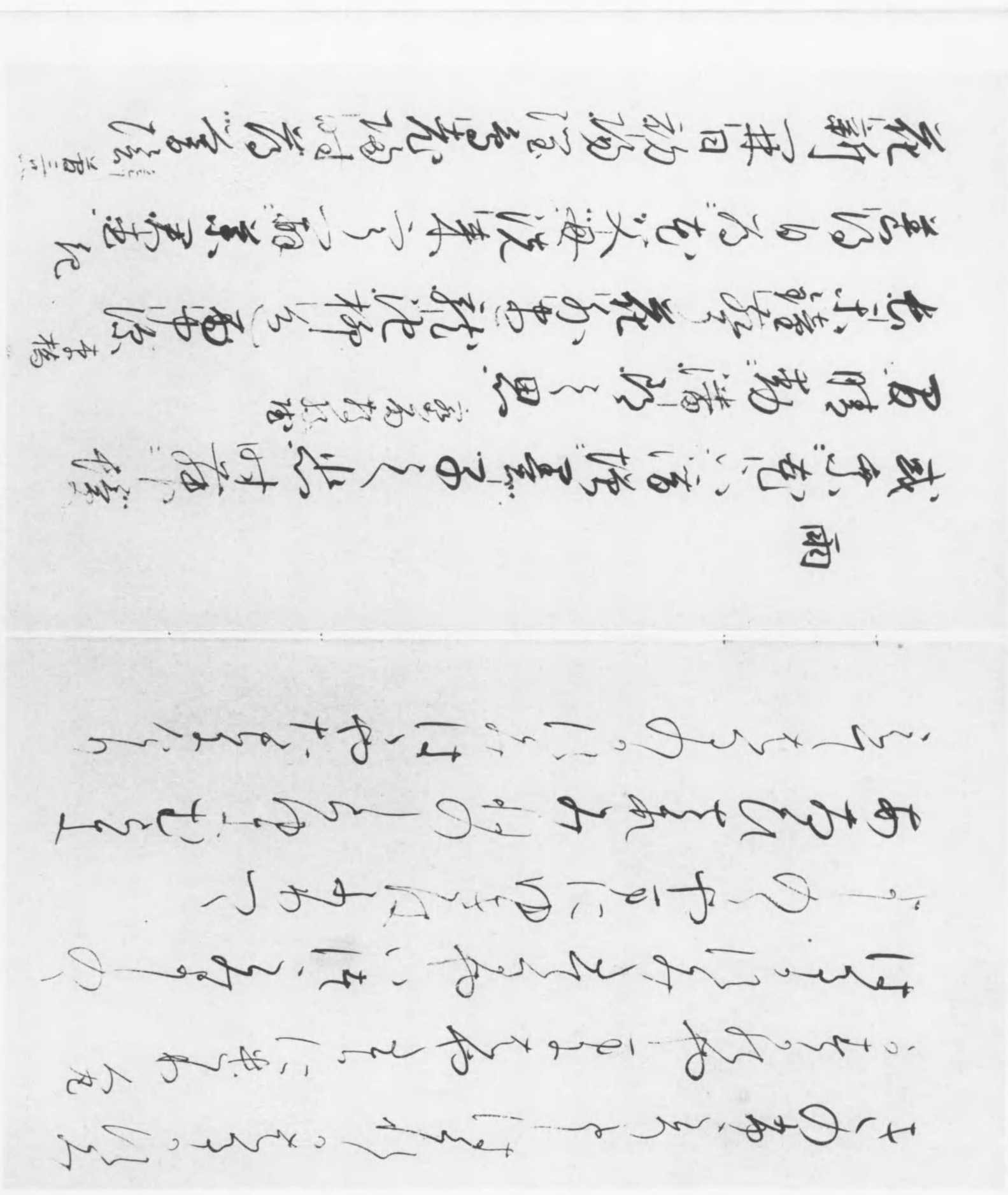
かさみふりちをこえてそらにうくひすのは
つこゑあまねきみよはありけれ 東宮雅院

うくひすのこゑなかりせはゆききえぬ
やまさといかてはるをしらまし 中務

霞

霞光曙後殷於火 草色晴来嫩似烟 白

鋪沙草只三分許 跨樹霞纔半段餘 菅



科賜勝風先扇雪晴春朝日未晴程　俊流

さくらはあめにぬれたるこえ
はなのいとしのけさうれむ
あをやまのこゑうれつるを必
いともてねらるたまつばきうみる　山

梅

白雪の流梅深渓水　枯形梅　出塀墻　白

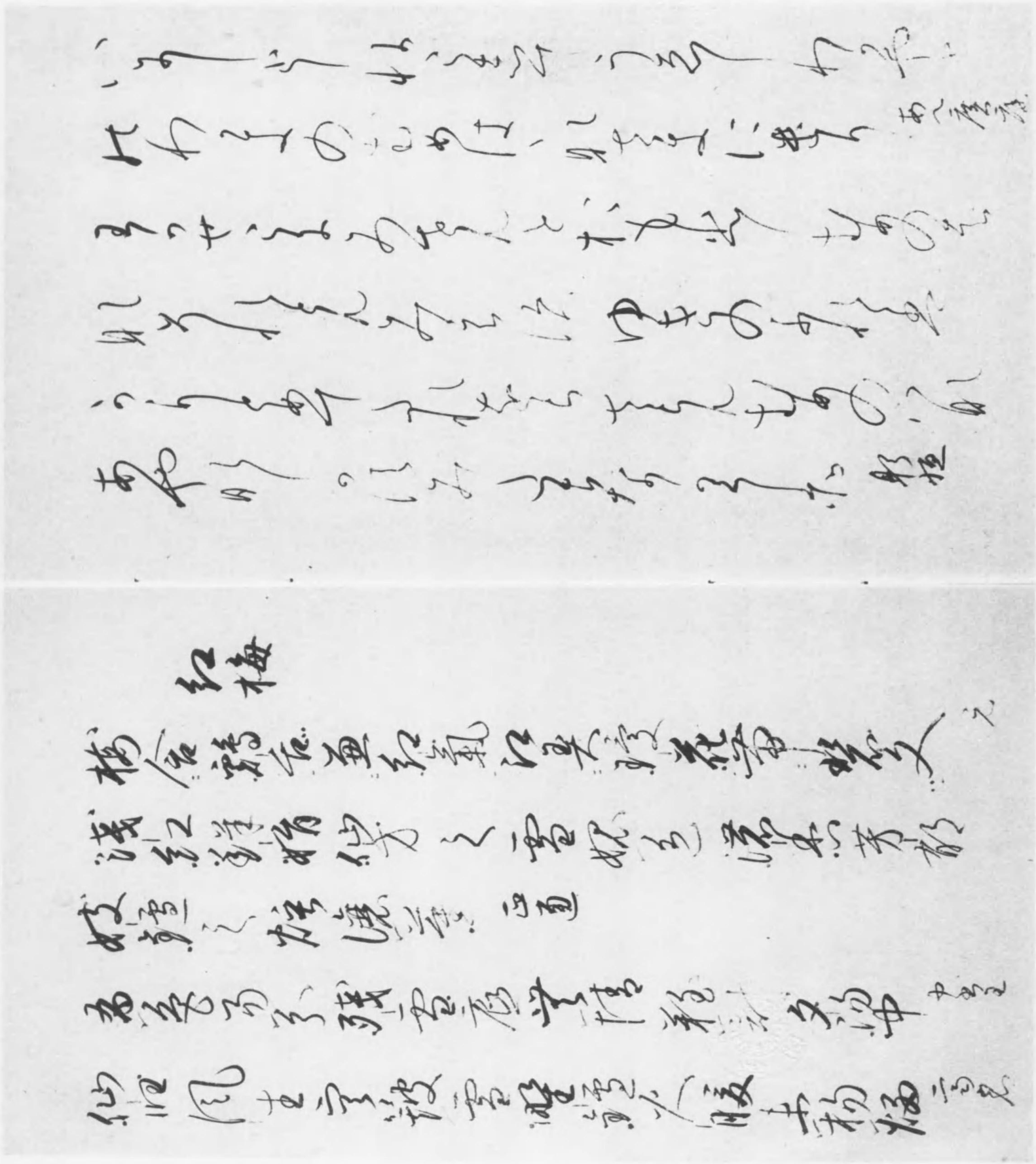
梅赤花に雪乱無上柳色和歌入酒中　三年春稿

流蕊臘雪形村雲　村雲　俳院喜風未扇先　村上佐志

青孫孫出頃一柳白梅裝成　庚嶺梅　白梅

百嶺花に雪注来仙情　大庚百枝梅

注ニて喜色流東の雪暖南枝花梅開　著三点



きみのいらてかたらみせんうしたれ
いろをもこのをしんしこしらたかり
物ろのをは物ひもれるしめもちな
ふなるねよよよよかへてそうみる 兼四位広業

柳

林間行客吟箏柱墻柳淮家曝麹塵 白

漸欲拂池騎馬客未忘遊滑上楊人 白 新柳

亟如廚花紅似粉照村柳翠於眉 白

誠古老古風情如見供奉當一句詩 白 同上

大庚岩ら、梅ふ落ら四粉粧直唐し

く杏ま一井岩弥紅ふ 江四て

雲霧紅鏡枝東日嘉姿黄珠嫩柳風

秋色更晴度月影清池面日影炫深　ほかなし

澄山月淡戈枝枯岸口風来混葉顔　首三

あをやまのとよりうつるけしきもそ

そもたてそれはほうこうひろうる書く

はるれそもしるべやなるまれ重ふるの

いものしるるいわるけれ

あをやきの下ゆるこもれるいとなれはて

ろろろろたいろろちわけるゆて重物

花　付落花

花明上苑柱林馳九陌之塵猿叫

空山斜月蓋千嶺之影　詩賦

池色深深落水花光燒燒火燒雲　白

是人家花使入ふかき春の秋津
豆豆豆風高位の第の玉体枝
体裏裏一人再入く紅花光深水上 首三六
淫淫水堂心流艶淫の波変(を)誰淫
花ふ淫粧流波の弟動唐 同之
欲謂之水則漢女弛粉く鏡清豆欲
謂く花ふ蜀人濯久く錦葉燦 同上 帙
孫自伊の時豆面載豆二三桃但玉風 首三六
花花如錦豆淫粧強玉風玉雲第
妖孫玉風様上巧妖艶(を)強豆芳 英の
脂美蜀の載強錦耳性素淡調玉の第 初秋
よなかのにしらてさらのしらわ芸

[illegible]

わかやどのもしみづそらよりそひて

ちりをんなれたる山ぶき　彰恕

みやのもりとしつるまんやちよをへて

しらたまぶき いつはなをんなる　寿性

落花

落花ふかき宮毒樹深し　雲心自入池　白

胡蝶落花相伴出　蓬花一時飛　白

書花面で閑入酣暢　延晩望茫々

勝景海浦　庭江

落花花籍風狂後　帝苑鐘面打時　江

蛙口含風翻漢樹　蜂鬚被花惜春　[illegible]

さくらちるこのしたはもむ
らてふらるしらぬゆきとそみわかく
のもわれどもつるのつ　ちこしろあらい
これこそはつわちあさまよもしられ

藤

帳望慈恩三月盡　紫藤花落島開　白

紫藤露底殘花色翠竹煙中暮鳥聲　相規

たこのうらにたちこさそふかぜにちり
みぶのさとにゆのおとあり　繩丸
ときはなつまれたるあやのしたの
れつまちのさまそちらつれ　無名

躑躅

晩薑尚開紅躑躅　秋房初結白芙蓉　白

夜遊人欲尋来把　寒食家應析得鶯　順

おもひいつるはのやどのいそてし

いたはをたれかふてるものを

歌冬

題着雌黄天有意　歌冬誤綻暮春　風

書窓有巻相収拾　詔帰無文未奉行　保胤

ふはしらみれひらしのけみそい

ゝやちるしんやまふれもれ　原見如望

わやどのやう夜ふさのひとんちち

りれらなんそのまる　道真

夏

更衣

背壁殘燈經宿焰　開箱衣帶隔年香　白

生衣欲待家人著　宿醞當招隣里嘗　菅

はなのいろにそめしたもとのをしけれは
ころもかへうきけふにもあるかな　重之

首夏

甕頭竹葉經春熟　階底薔薇入夏開　白

苔生石面輕衣短　荷出池心小蓋疎　物部安興

わかやとのかきねやはるをへたつらん
なつきにけりとみゆるうのはな　順

夏夜

風吹枯木時至而月照二株冷　友夜露白

風豆竹夜言冒訃月映枯叫者之川は

宮夜言宗芭度除更新は月明初は

なれよを物わるあるいひ出す

ひらはしてしりつ　おもはさらん

かくさるあなる花さそのみつ

ひとわ　わしらかしらは一も人危

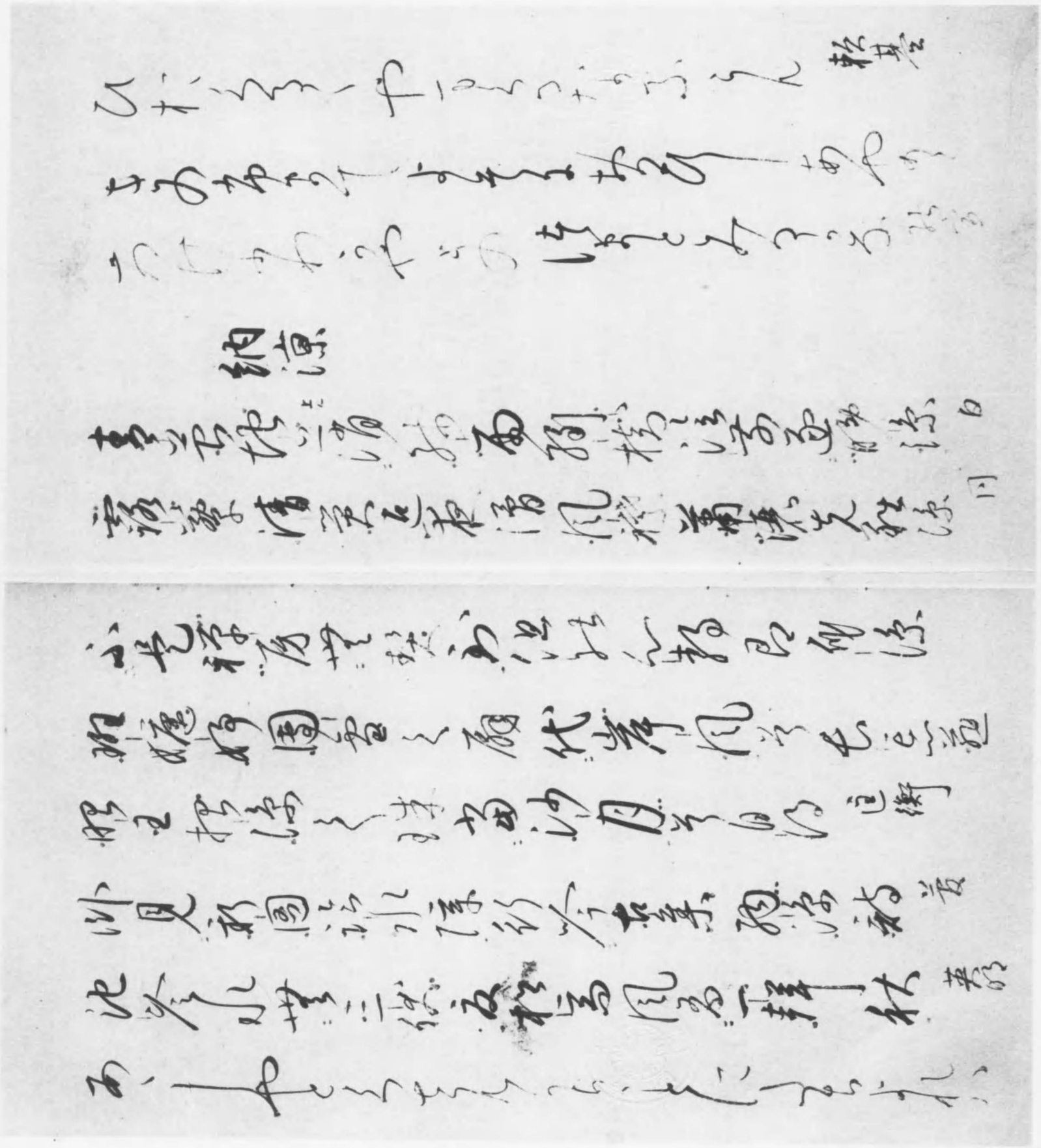
なのよすとそれはかのがが

なとまれなるひとこころあるしのあ

端午

為時の面白花身立世を言九園紅陽行　苔

わっこうとけるよ山のひとつあ　めをさま



あつさうまそうじさうれつのそれ
一たくつるのあきこそふれ
むまふいつみれば　あつはいしよ　春
ゐつけのいそのつもむすひて
なほをよりかもりつのれ

晩夏

終二月法名傷つる永根風浪の終れ
をつはつるあるのあ　あるのうゆとい
ゆのまつはむつむ　ともそ
はをこともきそ　あふうみふもも
けふはならしいとひとはふまわ

橘花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

螢火乱飛秋已近辰星早没夜初長　元

菫葭水晴蛍亡夜楊柳風高鷹送秋　許渾

明月仍在誰追月光在屋上皓皓不消尭

積雪片片床頭　紀

山陰卷裏疑迷地海賊篇中似宿河　直秀

[illegible]

[illegible]

蟬

遲々春日也蛍暖々温泉溢蟬々々秋

風山深鳴々高樹紅葉高

子茅舎酒会樹蔭蛍原帰来夜秋

鳥下緑蕪素菊字蟬鳥英樂澄高秋

今年異例腸先断不是悔心底言心　美

歳去歳来聴不変莫言秋日遠如雲

なつやまのこえはかすかにたゆたへ

はるかぜのおもみにきこゆ

うしをみよしろくかがやき

はるをなくせみのうたはたゆたへ　主光

扇

感夏不堪雪絶筆無忌用刀秋生涯

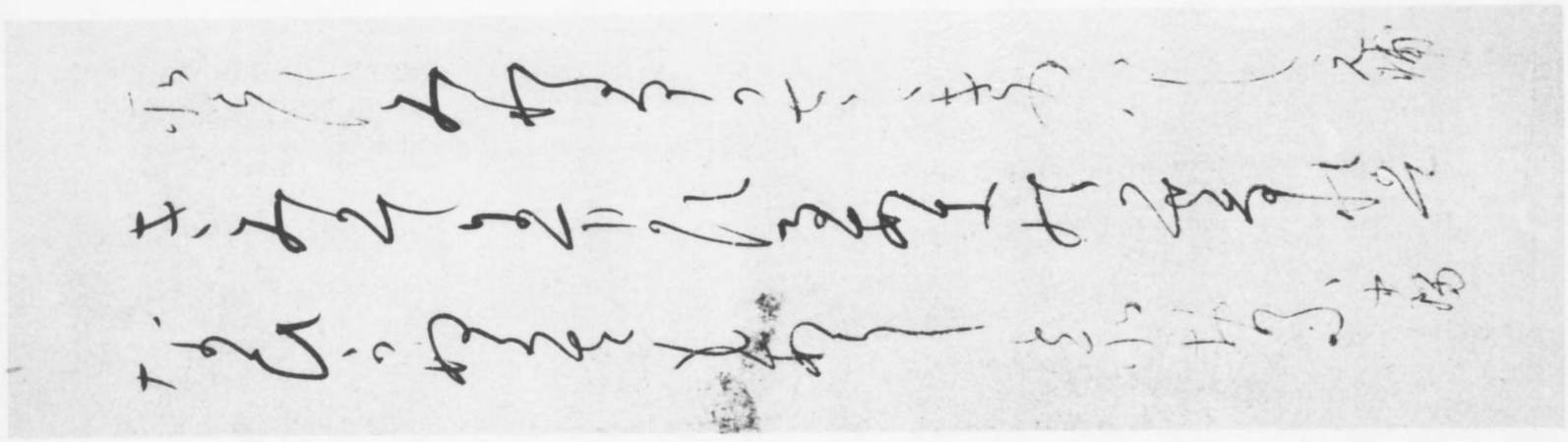
発月入懐中　白

不期長漏初不住暗驚秋風来前　美三

あるものはいつしかきえてなきあと

ちりのこりしたのてすさび　中勢

いつよりかうるあるものもいとけ



301
10

かなる踐全集 第一二
伊豫切（上）
昭和十一年八月廿一日印刷
昭和十一年八月廿五日發行
定價金貳圓參拾錢
編輯者 東京市下谷區中根岸町七二 竹田墨彩堂内 かな踐全集刊行會 代表者 武田基一
發行人 東京市下谷區中根岸町七二 武田基一
印刷人 東京市麻布區笄町六丁目一六〇 黑川秀藏
發行所 東京市下谷區中根岸町七二 武田墨彩堂 電話都合三五七番 振替東京六〇五四八番

落